

論文審査の結果の要旨

氏名

森先 一貴

本論文は、氷期の日本列島に現れた最初の現生人類文化に相当する後期旧石器時代を大きく二分する時期(後期旧石器時代前半期/後半期移行期)の古本州島(現在の九州・四国・本州からなる)に展開した人類集団の文化動態を、石器群構造分析を主要な方法として詳細に明らかにした完成度の高いきわめて独創的な研究である。

本論文は、6章と序言・結語から構成されており、第I・II章では、研究の目的と問題の所在について、既往研究の整理を通して述べられている。従来当該時期は、汎列島的に等質な文化構造をもつ前半期から、地域性(地域社会)が顕在化する後半期への移行過程にあたりと理論的に予想されてきたが、その実態はほとんど解明されてこなかった。そこで、その実態解明に焦点を絞り、新たな視点に基づく研究法を提案・採用する。

第III章～第V章では、具体的な分析が展開される。まず第III章では、研究の前提となる諸石器群を時空間軸に確定づける編年研究が述べられる。移行期の具体像の解明には、従来の編年研究のレベルを超えた分解能の高い編年が要求されるが、それを古本州島全域に存在する当該期の400遺跡以上の出土資料を徹底的に検討して、精緻な編年体系を構築することに成功した。この編年体系によって、移行期における地域石器群の成立過程を、初めてつぶさに辿ることが可能となった。特に、古本州島のほぼ全域において、ほとんど同時(V層上部段階)に構造変動が起こり、主体となる石器は各地で異なるものの、一斉に地域化が開始されることを明らかにしたことは、これまでの研究では不明であっただけに、きわめて重要な研究成果と言えよう。

第IV・V章では、編年研究によって解明された地域化の進行と並行して、西南日本を中心に、広域分布を見せる特異な石器群(国府系石器群[第IV章]、角錐状石器[第V章])が出現する現象に注目する。この一見逆方向(広域化)のプロセスを示す石器群の存在を、新しい分析視点に基づいて、地域集団化した各集団間の社会関係を担保するための情報交換網の構築を象徴する装置であると解釈したことは、先史考古学的研究として秀逸である。

第VI章では、上記の考古学的関係態を生み出した背景とその理由について、自然環境や生態系の変動に関する他分野の研究と対比することにより、検討がなされる。移行期は、OIS3(相対的に温暖)～2(最終氷期最寒冷期)の移行段階と一致し、寒冷植生の拡大や大型動物の絶滅期ともほぼ並行する。この環境変動に人類文化も連動して、主要な狩猟対象が広域移動をする大型獣からより狭い棲息空間を有する中・小型獣に移行したことに伴い、石器群の主体を占める狩猟具が小型化し、地域生態系への適応の強化等が惹起したと説明している点は、説得力ある議論となっている。

従来の研究では、石器を文化要素として捉える方法がもっぱら採用されてきたが、むしろ石器は生活の道具であるとして、生活や社会の構造変動を探り、その意味を問うと

いう本論文の一貫した視座は、研究理論や方法の多様性を拡大させ、より具体的に先史時代の動態を描く地平を切り開いたという意味でも評価できよう。ただし、植物質食糧の利用を推定している部分(第VI章)で、それが石器群構造に与えた影響に関する分析が手薄であること、環境変動に関する検討がいささか表面的な印象を与えること等、不満を感じさせる部分もなくはないが、本論文の意義を損なうほどのものではない。むしろ、論文提出者の将来の課題とすべきであろう。

したがって、本委員会は、博士(環境学)の学位を授与するにふさわしいと認める。